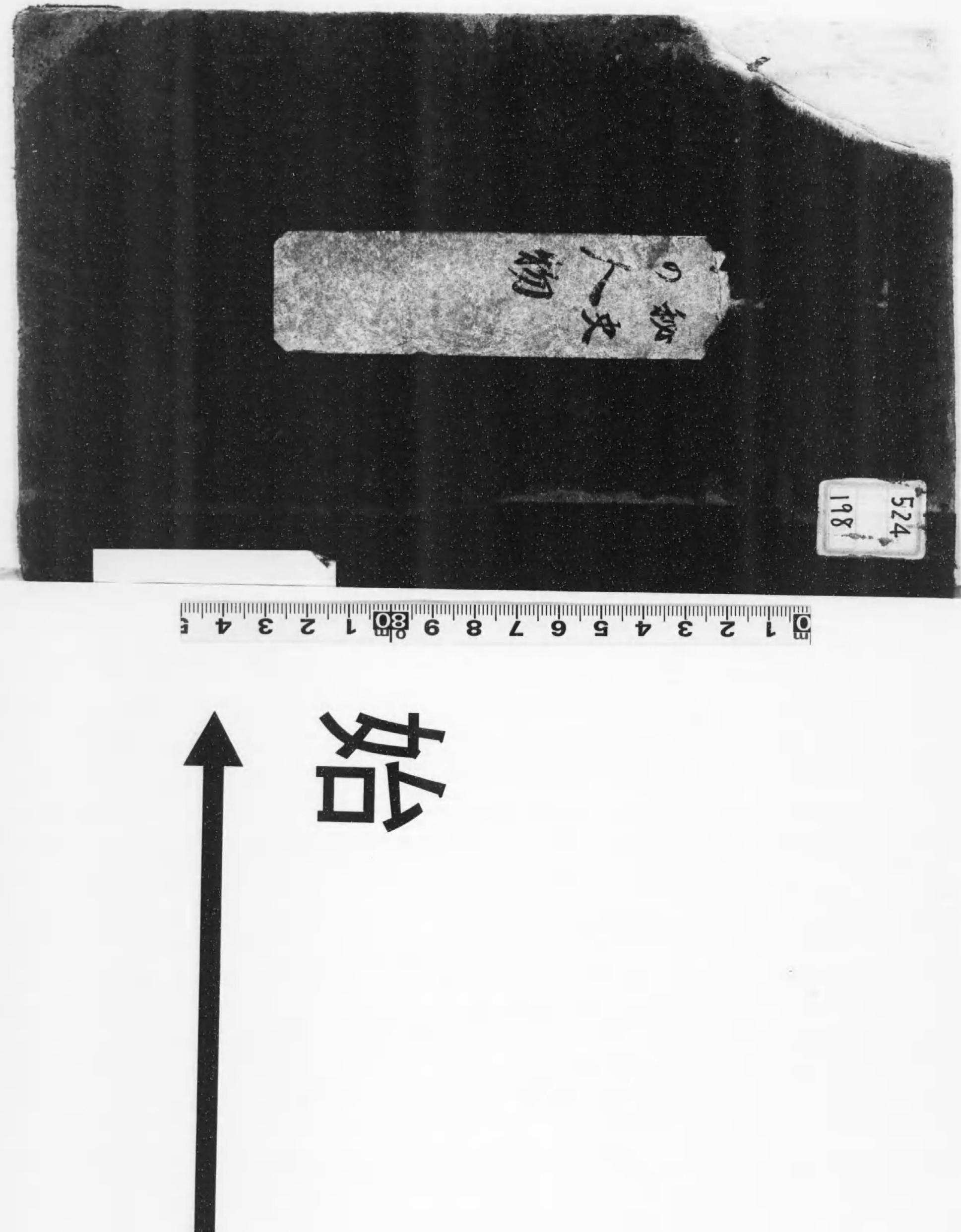

524
198

仙臺秘史

戊辰の人物

524-198

代序

三好監物　三好氏の勤　皇は共鳴する所從て余の進んで筆錄する所に係る

松倉良介　松倉氏は余が大事に當る修養法を問ひしより覺えず戊辰の實歷

細谷十太夫　細谷氏の懇請止み難く往年筆錄せしものに係る

要するに余をして假りに當時に在らしめば主義に於ては勿論勤

皇なれと余は九州には南洲、中國には松陰の勤　皇なり

余は太平洋を横斷してより余が勤　皇論は　大神より賦與せ

られたる人類の愛より出發し其大宇宙を蔽ふ

如上筆錄の目的を明かにする此の如し讀者余が目的を混同せらるゝなくんば

幸甚し

仙臺戊辰の人物何ぞ三氏に止まらん唯だ余が偶然緣に隨て見聞する所を筆錄

するのみ其他數十の英物に至ては他日之を記する其人有らん也

大正十四年三月十日

著者識

大正
14. 4. 24
内交

戊辰の
一匹獅子　三好監物
名清房字顯民
號不倚庵

仙臺の
小岩倉　松倉良介
改稱恂（まこと）
號文潭

白河口の
「烏組隊長」　細谷十太夫
改稱直英（なほひで）
入道鴉仙

戊辰の一匹獅子

三好監物

矢野顯藏筆錄

監物の先祖は名家なり

新羅三郎二男某より直系の子孫にして四國の阿波に居城する者始めて三好氏を稱す。

三好氏は淺井、淺倉、六角氏と並び稱せられしが秀吉の滅する所となる三好義嗣零落して泉州堺に在り商賈たり義嗣の子を義元と爲す。

仙臺藩祖伊達政宗公義元の人となりを聞き片倉小十郎重綱をして之を聘せしむ義元起たず　公自ら居に臨んで曰く汝を三萬石に封し白河を守らしめんと義元笑て曰く戰さには飽きたり一寒村を賜はらば往かんと公遂に黃海（陸中）に封す而して義元御客分たり六百石と稱すれど黃海一圓壹萬石ありしと云ふ。

二世の時幼少つぶれとなり三百石となる家臣等大に憤り堺に還らんとす然るに遂に三百石を以て客分となり後ち伊達家の家臣となる。

三好家は新羅三郎の直系三好長慶正統の子孫にして

一、系圖は先祖代々直傳のもの家に保存せしが今は紛失せり。

二、三好長慶の甲冑は黃海の舊臣某の家に藏す。

三、其他先祖傳來の寶物多くありたれど家督清篤(ギヨアツ)或は質入れ或は賣却して多くは之を失ひたり。

監物筆三好家系圖は黄海舊家來の家に在り此は家來の某が維新前泉州堺に至り三好家の墓を探がして復命せし時監物みづから筆を執りて編成する所に係る。

從容大盜を服す

監物『御目附(オメツケ)』の時大盜あり捕ひらる容易に白狀せず吟味毎に豪語して曰く白狀などするものか拷問に掛けるなら掛げろ監物吟味するこゝなる大盜繩を掛けられ手など紫色になりて來る監物制し聲とともにしづ〳〵出て來る威儀凛然たり大盜獨語して曰くあゝ『明御目附』とは此方か白狀せにやなるまいな監物ひどく縛つてあるを見左右を顧みて曰く如何なればとてまだ罪も定まらぬに解て遣せと云て繩を解かしめ從容として吟味せしに大盜殘りなく白狀せり。

一喝兩家の爭を解く

仙臺藩の槍術の師範家に諏訪萬右衛門野村新兵衛の兩氏あり野村死に臨み槍術の系傳を諏訪に預り且つ手紙を附けて子の事を托す野村の歿後兩家に系傳の爭ひ起り御奉行二十名若年寄十七名の手を經て決せず。

監物窃に股肱の十文字龍輔を呼び諏訪を訪ふて野村より子を托せし手紙を取りて來らしむ龍輔如何なる工夫を運らしけん取り來る監物乃ち北一番丁の役宅に兩家を呼び出す。此時監物若年寄たり正面監物他に壹名此れも若年寄左に十文字、荒川晴海、酉助も侍坐せり右に儒者の國分平藏、石澤俊平坐す野村諏訪の兩家は監物に向て遙が下方に坐せり監物石澤俊平をして論語託孤の章を講せしむ講畢るや監物大喝して曰く萬右衛

門わかつたか恐れ入りました。然らば系傳を新兵衛に返へせ萬右衛門躊躇兎や角と辨ず監物龍輔を顧みて曰く彼の手紙を萬右衛門に見せよ恐れ入りました兩家の爭ひ一喝して決す。

十文字龍輔は江幡(ヨタ)梧樓の著書に屢々あらはる梧樓各藩の藩制土風に通ず龍輔その薫陶を受け且つ監物の命にて四方を歴游せし故自ら各藩の事情に通せしならん。

あの眼光のけはしさ

監物『公儀使(コウキツカヒ)』たりしとき一日相撲を東京回向院に見る呼物は仙臺の大關荒熊(アラクマ)と他の某と曰ふ大關との取組みなり見物人ひし〳〵と詰め掛け場内立錐の地なし兩雄立あがるや喝采鳴りも止まず皆な勝負いかにと片唾を呑み數萬の見物寂としてさながら水を打たる如し行司木村庄之助團扇を敵手に指すやんやの聲は不平の聲と相和して場内割るゝばかりなり監物庄之助か指せし團扇は不埒なりとて棧敷に呼び附け詰責す庄之助之を辯す監物大喝更に式守伊之助を呼んで之を問ふ伊之助監物に同意す因て復た一番す荒熊見事に敵を投げ付ければ喝采の聲百雷の一時に落つるが如し監物したりやしたりと膝を打て大に笑ふ後ち庄之助人に語りて曰く『實は荒熊の勝ちなりしがあのまなこのけはしさ實にぞつとしたり咄嗟の場合くろうとてすら見わけのつかぬものを恐ろしき仙臺の御奉行樣かな』と荒熊は當時『大津繪』にまで唄はれし大相撲なりし。

大相撲『荒熊』御禮に來る

荒熊御禮かた〳〵仙臺に來りて興行し一日監物が北一番丁の邸に伺候す監物酒を饗す荒熊醉ふてさめ〳〵と泣く監物此の酒宴に泣く奴かあるかそれとも譯が有るか荒熊涙片手に御酒席恐れ入りたる次第なれと實は

先年江戸回向院にて受けたる御恩を想ひ出されて覺えず御席を汚したり彼の時負けとならは何の面目有て生きながらふべき幸にして御目鑑に入り敵を倒し顔も立ちたる次第御高恩の段は今更思ひ出すだに勿體なしと監物慰諭更に命して酌ましむ熊荒興に乘し出てゝ諸肌ぬぎ庭の大石を兩手に擎げて足ぶみす大地も爲めにゆるがんばかりなり監物見て快哉を呼ひ更に酒肴を命じて之を犒ふ荒熊出でて曰く生來かかる痛快事なしと時に座に酉助あり荒熊左手に酒盃を執り右手酉助を掌上にあげ且つ掛み且つ酉助に戲る譬へば扇に物を載せて弄ぶが如かりきと酉助云ふ。

一日に大鷲大熊を倒す

安政四年監物年四十四伊達家『御備頭』の役を以て松前の『白老御陣所』にあり正月三日　伊達家御嘉例の『御野初』につき陣所を擧げて山狩を催す人數三百人ばかり例の『勝色金丸の旗』を推し立て白老附近のタルマイ山へと推出す五郎清篤二十八歳大力無双の千葉倉松三十三歳等左右に從ふ軍法に據り山を十重廿重に取圍みひし〳〵と追立てけるにとある谷間より一疋の大熊飛出でゝ山に駈け上ぼる其の勢の凄じさ勢子とも驚て右往左往に逃る熊のさり〳〵と嶺つひひに監物の陣所目蒐けて來る左右の者とも何れも監物に近かるべしと云ふ監物笑て曰く伊達の御家例『御野初』を催さるゝは實地戰ひの習にしせんが爲め　貞山公以來の御諚なり武士をして治に居て亂を忘れしめざる爲めなりされば戰も同然箇程のもの何かあらん我が腕前を見よとて動かす時に玉蟲左太夫の父權兵衛監物の十匁銃を携ひて侍す監物權兵衛に向て其の鐵砲を此方に遣はせと云ふ權兵衛十匁にて打たば熊必ず飛かゝらんことを氣遣ひ命に應せずして避く斯くと見て監物が刀持たる家來の

須藤總助を呼ぶ惣助亦た退く斯くせば監物止むを得ずして退かんと思ひたればなり何ぞ圖らん監物傍らにまご〳〵せし士卒の銃を奪ひとるよと見る間に熊は早や數間さきまでのさばり來る監物わつかばかりのもだを楯に熊を遣りちがひさますつくと起ちける物音に驚かされて熊のふりかへる一刹那監物きつとねらひを定めて打出す霹靂一聲熊は月の輪打たれてどうと斃れけり一軍胆を消さゞるなし畢りて陣屋に引揚げけるに間もなくこはそも如何に前面の大かれ木に何處よりともなく大鷲舞ひ下りてとまれり衆たゞ〳〵騒ぎ罵るのみ監物ゑてもの御ざんなれとばかり此度は十匁筒を持ち出でねらひを定めて一發うち出す凄じさしもの大鷲箕を倒せし如くどつさり地に墜つ衆皆な舌を吐く監物笑て曰く今日は如何にも目出度き日ぞ一日の中に鷲(露)も熊(英)も退治して仕舞つたり、いざ飲むべしとて酒を賜ひ例により千葉喜左衛門なと曰ふ一番首のもの共に物を賜ひ一軍英姿颯爽として凱旋せり今に白老附近のアイヌの年老ひたるものとも當時監物の英風を說き公が如きは人にあらずトノカモイ、ニシバ即ち大神なりとて嘖々驚歎して止まず鷲は兩の羽を合せて一間ばかり熊は皮にして持ちかへり坐敷の敷物にせしが二間四方ばかりありたり毛のあら〳〵しき見たばかりにてそつとする代物にて有りたり。

具足をためし打す

古き甲冑を塗り直したるものにして嘗て監物十匁に五匁の强藥を籠めて其の胸板を打たるに彈丸ひしげたる有名なる代物なり此時居合せたる人々何故に具足の前のみためして背をためさゞるやと監物笑て『武士は敵にうしろを見せぬもの』と

一朱金の『豆』を蒔く

監物鷹司關白家に到りて請ふ所あり伺候には儀式あれと關白家にても事あれば仙臺家の奉行に内請せざるを得ざると故伺候の式もそこ〳〵やがて奥に導かれて酒肴を賜ふ監物醉に乘し仙臺の追儺(オニヤラヒ)は内鬼は外を御覽に入れんとて豆蒔を初しむ豆とて蒔きしものは悉く燦爛たる一朱金なり五百兩を蒔けりと云ふ蒔き畢つて豆蒔ももう疲れたりとて辭して出つ醉脚蹣跚玉山遂に頽れて玄關に醉臥す鼾聲雷の如し關白家も例になく出でゝ見られ其の磊落豪放の態を如何ともする能はず玄關先きより駕籠を許させ玉ふ仙臺の御奉行關白家の玄關に駕籠を横付けせりとて其噂さ京都に高し　樂山公監物の議を用ひ一週間程早く御歸國あり諸般の準備を整ひらる。

討幕の和歌を近衛家に献す

監物の　樂山公に從て京都に在るや上國の形勢を察し疾く歸りて備ふる所あらんとす一日近衛家に至りて君侯歸國の　執奏を請ふ近衛家にては天下の諸侯一人として歸國せるもの無きに非ずやと詰る監物云く天下の諸侯は天下の諸侯なり仙臺家は仙臺家なり近衛公かさねて將軍家さへ歸東せざるにあらずやと監物復た謂ふ將軍家は將軍家なりと近衛公も今はこれまでなり然らば將軍家の許しを得られ然るべしと監物眼を張り然らば短冊を賜るべしとて即座に討幕の和歌を書して上る近衛公監物の精忠に感じ給ふ。

討幕の和歌は大坂を破り箱根を越えて幕府を仆し皇政を維新すべしとの意なりしが原稿を失へるぞ惜しき監物樂山公の駕に陪して急に歸國し準備おさ〳〵懈りなし。

不思議の小箱を關白家に

監物京都に上る時江戸にて家來の某に命じ枕繪の精巧なるものを金を惜まず買入しむ家來妙な事とは思ひなから命の如くす京都に上りて監物鷹司家に伺候す伺候の式は式として畢て鷹司公と御簾中と御對座の所へ通され酒を賜ふ土產なりとて一首の和歌を添て奉る意は天地の開けしより變らぬものは此道のみてふ歌なり御簾中初め不審に堪えず開て之を見んとすれば監物いや〳〵此れは監物の居る間は開かるべきにあらずとて再三御簾中の開かんと仰せらるゝを推して止めけるゆへ關白御夫婦も詮方なさに監物の歸るさ溜りかねて打ち開き見られけるに三重の箱の中に江戸にて買入れたる春畫を入れてありしのみならず小判三百兩を敷きてあり關白家も且つ笑ひ且つ喜ばれしとぞ箱は杉、檜、桐にて差し一つ〳〵仙臺の名產樺、白、紫、の布巾(フキン)にて包みたるものにて容易に開き得ざる樣に仕掛けたり。

加州侯小門より監物大門より

鷹司關白家の御門は時刻過ぐれば小門より出入せざるを得ず監物の謁せし少し前、加州侯など已むを得ず小門より出でたり然るに時刻過ぎけるにも拘はらず監物は堂々大門を明けさして出でたり監物の家來の某加賀さへ小門より出でたるに主人は關白家の大門を明けさして出でたるは實に三十餘年の今ま猶ほ氣味々々しいと。

堂々として發す

樂山公の　御上洛は監物の献策なり而して××××の反對する所たり×××は之が爲め閉門を仰せ附け

らる×××の家來とも大に憤り監物を増田の松原に要擊せんとて待つ監物の供勢至る二三十人と思ひきや左右ひし〳〵と銃隊にて固め堂々として來る隙の乘ずべきなし×××の家來ども避易して發せず。

大八をして庄内を說かしむ

仙臺の城下に吉田大八の來れりとて監物に告ぐるものあり監物人を遣はして之を招かしむ大八到る監物曰く庄内藩動もすれば干戈を動かさんとす甚だ不可なり今の時干戈を動かす恐くは亡滅を招かん一反干戈を動かせば朝廷に對して恐れ多し況んや大義名分をや庄内は諭して之を止め且つ助けざるべからず幸なる哉君が藩庄内に近し疾〳〵行て之を說破せられよ大八大に然りとして之を諾す監物機失ふべからず失禮ながら唯今直ぐ出發せられたし大八躊躇の色あり監物とく察する所あり金百兩を出して之を與ふ且つ僕に命じて歸國の節京都より乘り來りし『切棒の駕籠』を命ず大八斯るものはとて辭す監物然らばとて家族の駕籠を出して大八を促がす大八庄内に入りて說く所あり故に庄内藩初め兵を境外に出さず。

諸書此の時大八上京せし如く記するは誤りなり庄内藩に使せしなり酉助謂ふ大八來訪の狀は猶ほ之を記憶す大八あかり顏の男にて人に接する豪放にして無作法なりき博徒なるべしとの評判ありたり。

品川彌二郎と約す

監物京都に上り　青蓮院宮家に館す酉助從て在り品川彌二郎來訪す彌二の服裝甚だ華奢なり紫と白の大縞のズボンに黑羅沙のマンテルを着て意氣頗る盛んなり監物別るゝに臨み彌二に向て云ふ××と××は御免なり君と黑田良介來て吳れと言肺腑より出づるものゝ如し何か事情ありしならん酉助たしかに品川の服裝を

記して忘れず。

監物晝夜早駕籠にて下り岩沼にて朝飯をつかひ家に入らずして直ちに登城す此の夜飛報あり總督には九條公、副總督には澤、參謀には醍醐樣、下參謀には大山・世良・東名桃生郡に上陸せりと蓋し京都にて品川と約し乍らあくとなくりに來りしもの藩論の變ずるを慮りしものと見ゆ。

此時酉助父に別れ北一番丁の邸に入り休む間もなくすぐなり。

紫縮緬の鉢巻しめて應接す

監物之を聞きすはこそ城より下がりがけ追廻に駈け附け馬に鞍置き鞭を揚げて驀直に東名に到る、一隊六百人薩・長・肥三藩の兵各二百づゝ已に上陸して休めり、接待の者すら有るなし監物即ち松島遊覽に託して日を延ばし更に鹽釜に上陸して日を延ばす、此時酉助など醍醐樣鹽釜近傍の銃獵にとて伴せるを記す、斯る中に一隊愈仙臺に入ることゝなりしが城にも入かねまじき勢なり、彼れ此れする中に陣所を養賢堂と定め一隊之に入る此間杉山臺仙臺郊外に於て銃隊演習の　御覽あり。

矢野長之進嘗て此の時の狀を語るらく監物紫縮緬の鉢巻しめ意氣颯爽一軍を呑めりと。

銀畑管を笏に刺客を說服す

一日二人の侍あり痛く決心したる風にて訪ひ來る、之を監物に通す監物謂ふ『通せ』ものども刀なり短刀なり携え來らば其儘にして措けと、二士謁す監物日常携ふる所の銀卷きの勇ましき煙管を笏にづか〳〵と二士の前に進みてどつかと坐はり眼を見ひらき貴公等は此の監物を暗殺しに來たな、よし暗殺されよう然しよく

聞け大義名分といふ事を知るかとて滔々として說き去り說き來りて天下の形勢に及ぶ、炎々たる火山の火滔たる大海の波、二士のあたまよりあびせかく、見れば貴公等の短刀は襖の陰にあるようなり刀は武士の魂、さあ刺すなら刺せ……、二士冷汗背に流れ一言を放す能はず呆然首を俛するのみ、已にして二士豁然悟る所あり惶愴陳謝して去る。

是より先き養賢堂の丸條公を襲ふなど云ふ風說紛々たりしも監物の勤　王論洶涌として仙臺城下に漲きり人心少しく安かりき。

三好監物行狀

原稿は三好酉助より呈せし草稿を勤政廳にて岡千仞等改削し太政官に差出せしものなり。

明治三十二年著者宮城書籍館にて一見せり其文の雄拔豪宕なる監物の人となりに添ふ。

忠節錄

三好清德（キヨノリ）監物四男　其母監物の夫人の言に據るとて草稿せしものなるが酉助等の見聞など少しも容れず。

反正錄

男澤陳平編間違多し

三好監物勤　王始末

三好酉助號天山監物三男　草稿中從來の第一史料ならん。

監物の苦境

監物の討會は助會なり監物の方針は會を討して會を助け又た庄內を復讐より救ひ出し與に俱に勤　王の仲間入りをして謝すべきは謝せしめ其上にて列藩を京都に會し正々堂々維新の大改革を行ふべしとの大抱負にてありたり斯くして却て官軍に悅ばれず又た一方は無論佐幕派に惡まれ板狹みの姿となりて斃れたり。

八月十五夜の月

閏四月四日監物若年寄兼御奉行御用辨事を罷めらる、暗殺の報頻々たるにより北一番丁の邸を五郎清篤に托し六月和淵より狼河原（ライノカワラ）を掛りて黃海に歸る。

男澤陳平後尋ね來り『參政監物』には八月十五夜の月見して下さるといゝが』と歎聲を洩したり蓋し陳平は仙臺にて八月十五日の事情を聞ての事ならん。

八月十日の痛はしき日

八月十日酉助は姉婿三浦×太夫の戍辰戰死の葬禮に會し北山にて遺髮を埋め土を掛けつゝありし所へ黃海（キノ）より家來か駈附け急報あり云々其足にて直ぐ北一番丁邸に還り十日の夕方仙臺を發し徒步にて黃海に馳せ下る高清水（タカシミヅ）栗原郡にて泊り翌十一日の晝黃海より歸り來りし『御小人』に逢ふ此れより以上感極りて語る能はず。

監物の遺物

一和歌　一幅　三好監物自筆　酉助所藏

一山水　一幅　三好監物自筆　酉助所藏

一書簡集　一軸　三好監物自筆　酉助所藏

明治の初年酉助佐藤素描とて監物の下に「勘解由役」たりし人の勘めにより金を借り同人へ預けたるを同人死後中島信成の手に渡る。

素描の家を始末するとき監物の遺物を見附けこんなものは焼て仕舞へと云ふものありしを如何なる譯か信成が手に入りしものゝ由。

右三幅信成が家に藏す。

監物臨死の三幅對

一、文天祥衣帶中の贊　一の關侯坂上邦行朝臣筆

一、文天祥の畫像　白石家中にして東洋の弟子川村春洋筆

一、岳飛豪氣堂々の詩　同侯筆

一、岳飛の畫像　同人筆

一、謝枋得雪中松柏愈青々の詩　同侯筆

一、謝枋得の畫像　同人筆

右三好清德より遠藤善夫へ質入れす善夫我が家に在れば君の家にあるも同然なりとて猶は同家に預けあり。

右三好監物割腹の時床の間に掛けたる名幅にして歴史上有名なる遺物なり。

監物の自画像

監物自刄に臨み自ら肖像を畫く甲冑鉢卷にて熊の皮に坐せし圖なり清篤の家に藏す此より外に監物の畫像なし。

嘗て五郎清篤の家に寫眞有り一人は堀織部正、一人は監物蓋し函館にて撮影する所と傳ふ酉助の話に此れは五郎が北海道に仙臺藩の開拓の長せしとき副島が露國と樺太の事を談判せし爲め函館に在り監物の子たるを聞きそれじあと謂つて寫眞せしものと云ふ、即ち知るこの寫眞は副島と五郎の寫眞なるを。

右兩説如何暫く之を記して參考に供す但し五郎は監物などに少しも肖ずと云ふ。

樂山公生花を手向け玉ふ

維新後酉助岡千仞と　樂山公に染井東京駒込の御邸に御目見得す祿側に蓮の生花あり　公酉助を顧みて酉助……生花がいゝだらう時々活ける内へ還つたなら母御に申せ監物の爲め花を手向けて居るぞ啓輔千仞此の心を詩に作れ酉助恐れ入るのみ。

大西郷三好監物を評す

維新の初め西郷等一日東京の江東中村樓に會す木戸孝允等亦座に在り談ベルリ來朝以來海内の人物談に及ぶ或は佐久間象山或は吉田松蔭或は高杉・坂本を擧げ竟に西郷を推し紛々として決せす西郷默然たり衆之を西郷に質す西郷曰くそは四國や九州になし奥州に在り衆清川八郎を擧ぐ西郷笑つて曰く清川などふんどしかつぎさせる男ぢや衆惑ふ西郷從容として曰く諸君之を知るかとて

汨羅にも湊川て死かねて
たのみなき世になからうそうき

といへる和歌を誦す衆の夙に知る所たり西郷の呼んで海内の偉傑と爲すもの即ち三好監物たるを知る西郷歎じて曰く惜しいかな仙臺藩で殺して仕舞つたが氣味の惡い男であつた一座愕然相顧みて言なし。

右、今の近衛第一師團第一聯隊長××××西南の役負傷して鹿兒島の病院に在り、某なるものと枕合はせとなる某郷貫を問ふ××仙臺を以て答ふ某曰く君が藩に三好なる英傑あり君之を知るか××知らすと答ふ某即ち創話を擧げて之を談ず謂ふ某富時親しく坐に在り三好の月旦を聽けりと。

國事往復の書簡海中に沒す

監物苟くも國事に關せし往復書類は必ず密使に托して之を松前白老の豪家舟木十郎が家に送りて保存せしむ舟木の子同じく十郎とて小樽郵便電信局長たり一日酉助に語りて曰く御尊父の諸家往復の御手紙類は御尊命の如く大切に保存して有りしが白老より小樽に家を引移す際難船に逢ひ舟海中に沈沒して之を失ひたり殊に御尊靈に對して申譯なき次第なり御尊翰中には藤田東湖や其の他有名な方々の國事に關する書簡許多あり たり長州の家老福原越後からの書面も多くありたり福原は長州にて山口へ城を移し斯く城廓を構へたりとて繪圖面まで添へてありたり余程親密にせられしと見えたり云々。

附錄　以下酉助の談に非ざる分を錄す。

反對黨監物を評す

さあ、あの時の人物かネ無論三好さ三好に追つ附くものはないサそりや非常なもんだつた但木坂なんて云ふけれどどうして々々々

此方など三好の反對だが今から考へるとあれが一番サあとはとても及ばないヨ。

明治三十二年矢野長利高清水（栗原郡）に赴きしとき有名なる松本要人（カナメ）に面して維新の人物を問ふ應ふる所此の如し長利歸りて曰く矢張り三好が第一の人物らしかつた。

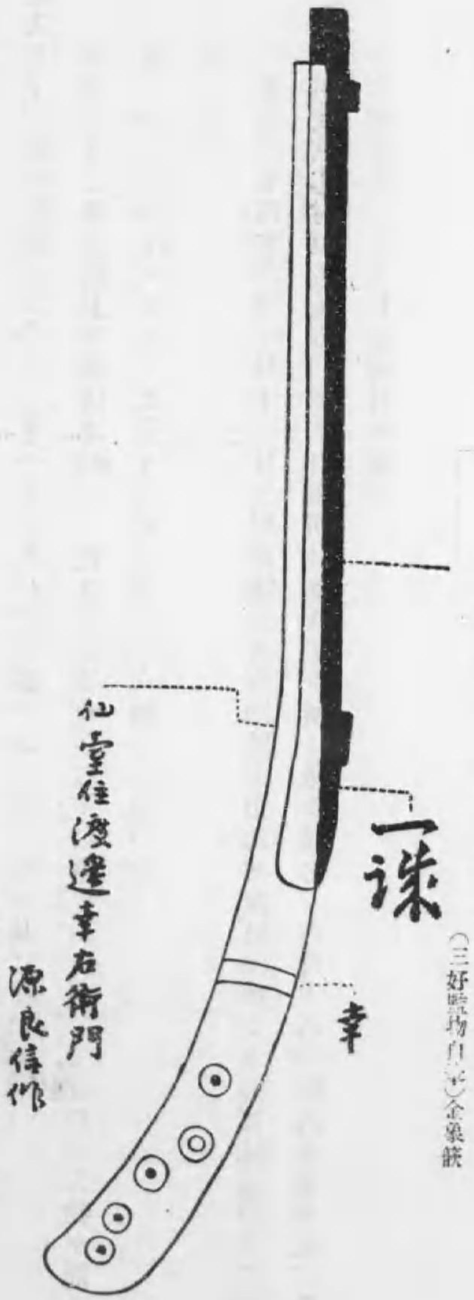
以上

明治三十四年六月十二日三好監物三男酉助號天山氏北海道函館より歸展仙臺市北六番丁杉山通角親戚志村恒敬氏方に於て口演同日筆錄する所に係る同じく六月十八日同氏仙臺市東三番丁聖天下（たま）木村氏方に於て口演同日筆錄。

仙臺藩奉行三好監物清房十匁筒

『文久壬戌冬十一月臣清房奉　勅答使上京師謁　註　文久二年壬戌
關白近衛公々犒其勞賜白銀若干清房不敢曠其　筒　壹貫六百目　片手を以て撃ちうる能はず
賜資以鑄此銃永紀家門之榮云』　臺　六百目

右銃身の下底見えざる所に刻す
吉字謹嚴歡賞すべし文章と與に監物の筆か
（三好監物自筆）金象銘



（右普通職工の書風渡邊氏の筆か）

右　宮城縣遠田郡涌谷町　本間仲次郎寶藏

題三好監物十匁銃圖

火器。謂十匁銃。重一貫有六百匁。臺六百匁。尋常人隻手不能擧。有照星焉。有照準焉。傍以金象銘二字。曰一誠。亦可以見其氣象桓々無他心矣。銃身題數十字。字々謹嚴。使人不覺正襟。戊辰之亂。三好監物。精忠殉于大節。天下所知也。然至於其武威。兼文事。則人多不知矣。監物嘗以命守備白老陣營。時正月初三。驅守兵。以狩獵。偶巨熊排雪而出焉。衆愕然。玉蟲某。知監物爲人不避危難也。提其銃而避。監物怒髮上指。奪從卒之銃。巨熊人立咆哮。衆皆汗。監物不動如山。立射。銃聲迸雷。巨熊應聲而斃矣。曰好下物。其威武可以知矣。蓋初三之獵。以養士氣。我　伊達氏之吉例也。監物處難而不迷。固雖豪膽使然。抑亦善火技可知耳。監物讀資治通鑑。家藏朱批。又善書。殉節之日。掛文天祥●岳飛●謝枋得之像賛。從容屠腹而死。其兼文事如此。監物奉　君命。上京都。拜　天顏。余藏其謝表草稿。監物嘗謁鷹司公。賜酒。大醉。戲曰。弊藩節分之夜。戶儺。請擬之。室內戛々有聲。散黃金者云。蓋氣節之士。兼文事者。世或有之矣。有機才如監物。則所罕覩。如監物。可謂忠義而豪傑者。

大正三年六月二十九日應涌谷本間仲次郎氏需書而與之

矢野顯藏謹識

仙臺の小岩倉

松倉良介

『出入司』仰付けらる

大童信太夫と私良介とは江戸屋敷の取片附け方を仰せつかりて居りましたところが但木土佐さんといふ『御奉行』さまと笠原といふ『出入司』と來て『タイコウ丸』といふ船で仙臺から來て君命樂山公だから歸れといひますが私は片附かぬ中は歸れないといひますと何んだか危ぶない模樣だから大童が江戸に殘る事になりまして私ばかり歸る事に

『出入司』即ち今の大藏省のやうなとこに『御藏方』『山林方』『御金山方』『御鹽方』などいふ今ならば局のやうなものが有りましたが笠原が『やあ何時事務を引渡すべ』といひますから事務など何時でもいゝから先づ『御藏方』に行つて役人に現金がいくら有ると尋ねたらたつた××兩しか無いといふのだネス戰さが始まつてるのですがナア……

鉛で五萬兩

そこで『山林方や』『御鹽方』に各々拾萬兩位づゝ有る事を知つてゐますから其方に行つて戰さの金を出せと云つたところが『そうゆう方に出す金でない』と云つて、とても聞かないのだネス其外に『銅御藏』といふのが有りましたが、そこには銅がはいつて居るのです……それがどうなりましたと……それは其時戰さの金に、つかはないで……とう〳〵召上げられましたのサ……それでも幸に『御金山方』にワケのわかつたものが

居て、そんなら細倉の『鉛御山』に鉛が有るといふのですから、そんなら、それを横濱の外國人に賣つたらよかんべといふので戰さ最中に『横濱』へ出しましたら、あつち外國の人は感心だネス商買に掛けては正直だネス、こんないゝものはなんぼでもほしいと云つて大喜びで僅かばかりやりましたが五萬兩で引受けてくれました鉛は粗製ですが鉛と一所に金とか銀とかが雜つてゐるので、その金や銀が大へんネウチが有るといふのであたりの鉛よりは高く買つてもらひました、それで一時横濱で鉛の上等を細倉と云つたそうだネス。

ところが其の時分ですから鉛は軍用で有るので、あつち外國の人に賣るとは不都合だ國を賣る奴だとか云はれましたのでそれも沙汰止みとなりました。

話しは前へ戻りますが『山林方』や『御鹽方』の金は平常『細民』などへ貸附けて有りましたからサアといふ時には取れずありがね現金の十萬兩づゝも召上げられたりなんだりしてしまひました。

生絲で九萬兩

仙臺家で非常な『御用』の有る時は『御城下』即ち今の仙臺市の『町人』へ『御用金』を仰附くることになつてゐましたが戊辰の時も戰さが始まつて困るから町人のいゝものを呼んで私良介が『戰さが今ま此の町へ推して來て御前方の頭の上を鐵砲玉が飛んであるくから……』といつてもとても信ずるところか『ナアにあんな事いつてまた御用金を召上げるんだべ』などゝ謂つてとてもほんにしないので仕方なく々々とうゝ〳〵郡村へ相談したネス、郡の『大庄屋』のやうな、えゝ堅いものどもへ相談したネスところが郡村の方が話せたネス、しかし金とては有りませんが金に換える品物なら出しますといふのですから、そんなら何がよかろうと相談しましたが生絲ときめました、東山陸中だとか柳津本吉郡だとか生絲を集めさしてそれを横濱へ送つたネスなんでも二百梱ばかりも集まつたネス一梱……サアア……その時七百兩でしたが……横濱へ出したらありがたい事には一梱七百兩づゝでたちどころに九萬兩になつたネスそれで戰さなどの入費が助かつたネス全く郡村で助かつたネス。

其時の談判ですか……サア戰さに勝つたら御上から返さつしやるが負けたら差上げたと思へと申したらみな〳〵奮つて出したのには感じたネス今もそのやうだネス。

また〳〵金がなくなつたから郡村へ相談して生絲をかきはだけるやうにしてチクトばかし少許づゝでも出して來ましたが感心したネスそれも横濱であつち國外の人に賣つて金にしました。

拾貳萬兩で汽船を買ふ

横濱でアメリカ人から私良介が行つて蒸汽船を買ひましたそれを乘り廻して居つたれば岩倉具視さんにぼつかけ追掛られてとう〳〵たゞ無償とつかへされ奪取たネス拾貳萬兩で買つて九萬兩だけ拂つた蒸汽船で『宮城丸』とつけ命名たのだネス……此時蒸汽船をもつて所有ゐたのは薩摩●土佐●鍋島●久留米位だつたネス……そこで工夫したネス船を買つたアメリカ人のとこへ行つてとつかへされ奪取たことを話しましたら氣の毒だ々々々といふのだネス然し幸にも十二萬兩の中參萬兩はまだ金をやりませんかつたから…私良介が或る方法を以て廿日たつか立たぬにとつかへし返取ましたツケそこでその船をすぐ用ゆる事も出來ないから損料でアメリカ人へ貸して置きましたが、寒風澤などへも乘つて來ましたつけがトウ〳〵大暴風で浦賀沖で破損して仕舞つたネス。

三萬兩の砲を此の松倉一人へ

あつち外國の人は一たび信用すると堅いネス私が始めて横濱の西洋人のとこへ行つて鐵砲を買ひ入れましたが、むこう先方でも奥州の仙臺藩と聞て奥州を一手で持つてると思つてゐましたし、今度の戰さは奥州がきつと勝つと見込んで仙臺藩ならといふので其時新しい鐵砲を參萬兩だけ唯だ此の松倉一人の名前で貸してくれましたから私良介もいろ〳〵金を工夫してしつかい恐皆弗つてやりました、西洋人はたしかですなア、其時大砲も買ひましたつヶ二門だけ……其の大砲がたいそう敵に恐れられました、一挺は相馬にやりましたが取られて仕舞ひました、一挺は仙臺へ持つて來たが此は召上げられました一番いゝ大砲でした、負け戰さだからネス

ぎつと五十萬兩

それからいよ〳〵戰さがドン〳〵推しかけて來る敵が城下へはいりこむそこで私も一枚の書附書いて立ち退きましたが其時『出入司』の取扱つた金をしめて計算見ましたが四十九萬兩掛りましたッケ、それで戊辰の仙臺藩の戰さの掛り戰費は先づざつと五十萬兩さネス……『銅御藏』の金なぞは出さずともいゝものを上げたといふものさネス、代に積もつて十萬兩も有つたべネスアハ、、、、、。

小田原の小屋に十日

敵が城下へはいりこんであぶない險危ものですから私良介は獨り妻の里へ隱れました、妻の里は今の八重垣町仙臺市とかいふ女郎屋のあるとこが其時分に『蜂屋敷』といつたとこに有りましたが貧乏家で妻の母の年寄が一人居りましたが私が妻へも知らせずにぱつと突然行きましたから妻の母が驚きました私が先づ隱くしてくない下さいと云つて、くされむさくろしき木小屋物置の二階に十日ばかり潜んで默つてゐました、樣子の定まるまで……すると可笑な事がありました或る日馬の音がしました……こりや來たナ……と思ふと細谷十太夫の聲です……馬へ乘つて來て大きな聲で……『松倉どこへ行つたかわからないが不明こつちや此方こないか來否と思つて來てみたバアさんきませんか』といふとバアさん『なアに來ないネス』とトボケたら細谷も『ウ、そうかなア……』と云つて歸つて行きましたつヶ……あとで細谷に逢つて先日君小田原へ來たつけなアと云つたら……そうかつて細谷たまげてゐましたつヶ……細谷とはちかし親密かつたから細谷も心ぼそいと思つて又私の居所を探がして友達どもへ御手柄にしようと思つて來たのでしたろうがなア……彼れ此れする中に敵の探索がきびしいもんですから……今度は矢本桃生郡の親類のとこへ行きました。

すると其時榎本釜次郎が江戸から船で逃げて來て松倉ひとり殘しては困るから船で松前へ連れて行くといつてわざ〳〵私良介を待つてゐると聞きましたが親切な事でした、そこで私が使を遣りまして構はず行つてくれろと申しましたら船が立つて仕舞ひました、此がために仕合せなことには『松倉は船で榎本と松前へ渡つた』といふ事になりましたがだん〳〵たつうちになんだか惟しく危險なつて來たネス。

小野で『推し入れ』の中に

そこでこんどは富田小五郎のとこ——あの小野桃生郡だネス……あそこ彼地の家來に私の親しいものが有りましたからそこへ潜みました其家は餘り廣い家でも有りませんかつたがバアさんに世話になりました、何かすると『推し入れ』にはいつて居たネス或る日バアあんが『推し入れ』へ這入れとめくばせしますから……サア

來たな……とはいつてゐますと豈に圖らんや××××……××のことですナ……アレが來たのです×は×××の在所（ざいしょ）采地へ妻子を連れて匿れてゐたのですが、時節が變つたもんですから意氣揚々として……妻子を連れて仙臺へ歸りがけに寄つたといふのです……そして私の『推し入れ』のぢき前で『松倉などはどうしてゐるかおれ（乃公）のいふことキケばいゝのに……困つてるだろう』などゝいふのですネ……早く歸ればいゝと思ふ中に話に花が咲ひて其晩は泊るといふことに爲つて、泊り込んで仕舞つたには弱りましたなア……第一、二便に困るのですなアハ……ぢき鼻つらもとですから……出るわけには參りませんし……ところがバアあん氣がきいて『こゝは年寄どもの寢るとこで早く起きますから』といふので體（てい）よく奥座敷といつたところがぢき次の間へ×を寢かしましたつケ……次の朝閑々と立たれたのには弱りました。

ハッ……狐にバカされましてネ

そこもだん〳〵危ぶなくなりましたからこんどは富田（小五郎）の家來ひとり連れて妻のとこへ行きました小野から松島。松島から鹽釜街道それから道をよく知つてましたから暮方かけて此の近在（きんざい）の岡田村落の鈴木といふうち家へ尋ねて行きましたが途中で可笑なコトが有りましたつケ。

だん〳〵行く中に狐にバカされましたつケ……ハ、、、あつちにも焚火……こつちにも焚火……捕手（とりて）らしいものが居るゆへ、そつちの堀こつちの藪などこいで漕あるきまわる中にとう〳〵夜が明けて鹽釜から一里半ばかりの道を夜明けまでかゝつたけネスハッハ、、、、、、。

ところが先方へ着きますと下女が米を磨（と）いでゐましたには弱つたネス知れますから……そこで困つたと思ふと富田の家來が氣をきかしまして下女のトコへ行ってコ、は鈴木さんですかとトボケて『こう〳〵いふものが來ましたらそう云つてくれろ』といつて下女のあつちへ（彼方）行つた中に私を手招きしたから私は妻のとこへ駈け込みました……妻がびつくりしましたつケ……まだ寢てゐましたから……蜂屋敷へ隱れてから始めて逢つたので……居所を知らずにぽつと（突然）逢つたもんですから……

そこに潜むことになりましたが私の友人が時々たづねて來て妻を慰めてくれましたが、もとより私がソコに潜んでゐるとは思ふ筈がないから可笑な話が有りましたつケ……函館から仙臺のあきんど（商人）がわざ〳〵奥樣へ御尋ねして來ましたと云つて私の這入つて居つた長持のぢき前で旦那（松倉）さんに函館で御目にかゝつて御金を二兩戴いて來ましたと云つて、いろ〳〵妻を慰めてくれましたには感心もし又をかしくもありました。

そうこうする中に私が函館へ逃げたことがウソだといふ事がわかりましたし且つ妻子を捕へてせんぎ（糾問）するかも知れないといふので危ぶなくなりましたから妻の舍弟を連れて江戸へ出だしました。

此首が落されるとこでした

たしか丸森（伊具郡）から梁川（伊達郡）それから福島へ間道を拔けました私が駕籠へ乘つて妻の舍弟が先きへ行きましたが向ふから鎗を立てた奴がやつて來ました、そうして先きに行つた舍弟と何か問答が始まりましたがどうすることもならなくなつて仕舞ひました鎗印（やりじるし）が仙臺ですから……こりや困つたと思ひましたどさくさ（騷擾）するといけない（不可）と思ひましたから構はず駕籠の簾を下ろして行きますとあとから追ひ掛けて來て『もし々々あなたはどこの御藩ですか仙臺藩でおありになりませんか』といふから仙臺藩といふと、ずぐやられますから

『いゝや私は××藩です』といふと『それでは失禮しました』と引返ひして行きましたから先きへ行きましたが妻の弟が松の木のねつこ根元に腰掛けて待つてましたから『あれは何といふものだ』といふと『あれは藩廳のなんとかいふ山林方の役人だ』といふのですがあれなどにつかまるもんなら御手柄に差出されて此首が落されるのでしたつケ。

横濱・野毛・神奈川へ

江戸から横濱へ行つて先きに取引したアメリカ人のとこへ便りましたが困つたことになつたとて非常に心配してくれましたがあつち外國の人は堅いそうして非常に親切にしてくれて扱ひなどは御話しの出來ないほどでした、だん〳〵たつ經過中に探索がはいり西洋人も非常に心配してくれまして、横濱在附近の一里さきの野毛の大きな醤油屋へ厄介になりましたが萬事承知してよくかくまつてくれましたそこでもあぶないからこんどは神奈川の寺へ潜みました夫婦ものゝとこへネスそこで可笑な御話しがありましたヨハ、、、坐敷が二間だけで私の潜伏してる次の坐敷が夫婦の寢る間でしたが夜になるともめるのですやきもち燒ですネハ、、、、、さアひどい喧嘩ですから聞てばかりもゐられませんし襖を明けてなかへはいり仲裁ますとなほり融和ますがしばらくすると、なかよくなるのですがなア、毎晩喧嘩して毎晩なかなほりして毎晩きかされるのには弱りましたつけアハ、、、、。

『岡ツ引』といつしよに一つ蚊帳

すこしゆるんだ弛から江戸の谷中の天王寺の末寺に潜みますとボツ〳〵御尋ね者が寄つて來ました大童信太天

も妻子を連れて澁谷に潜みました其時は流石は大都ですから私どもの如き『賊』がですなア一人や二人は何んでもなかつたネス。

或る日天氣もよし此の天氣のいいといふことは寒いことで寒くないと出られません寒いと頭巾を蒙ぶるにいゝのですから……大童のとこへ行きますと門の前に岡ツ引刑事のやうなやつがゐましたからこいつ仕舞つたと思ふ中に大童の女房が格子のとこで手を振りますからハ、ア大童がやられたなと思ふ途端になんだといふことなしに『其方は大童のうち家に來たのか御用が有るから』といふのでつかまり、逮捕ました何んのこつた事かわかりませんから『何で連れて行くか』と云つたら『何んだかわからないがたゞ無理由連れて行く』といふのでハ、アといつて連れて行かれて愛宕下あたこしたの拘留所へぶつこまれました、拘留所といつて坐敷ですそこへ嚴重に岡ツ引が三四人『不寢番ねずのばん』をしてるのです、夏でしたが蚊が喰つて寢られませんから蚊張が無いかと申しますと罪人に蚊張は吊らせない法だといふから罪人でも蚊には困るからと話し込んで錢を出しましたらソコは江戸ですからすぐ蚊張を借りてくれましたつケその時『足かせ』を掛けられてごろつと寢てましたが岡ツ引の番人が却つて蚊に喰はれてゐますからなんぼ如何あなた方でもひどかんべん困るから此中へはいれと云つて三四人一所に一つ蚊張に寢ましたつケ。

三尺牢にぶちこまる

何氣なしになんで連れてこられたのかうす〳〵聞て見ますと眞實、なんで連れて來たのかわからない風ですから其儘にしてゐました。

それから江戸のひとや牢獄へ移されました三尺牢……それこそほんとの三尺牢で三尺しかないのだネスそこへ巴なりに二人づつぶつこまれるのです、私ひとりは元の通りですがあとの一人は毎日入りかはり立ちかはり別な奴がやつて來るのには弱りましたカサカキ、シツカキ濕疹いやはや二人で身動きもならなかつたネス三尺牢の翌日だつたネス顔洗ひに出ろと云ふので顔洗ひに行つたらパツタリ大童に逢ひましたつケ……話しすることがなりませんから互にニツコリ笑つて別れました……そこで私より先きに大童もつかまつた事がわかりました。

そうこうする中に會津藩の人間が一方ならずニセガネ贋金を吹いた鑄造ために政府では會津人は殘らず召捕つて調べろといふので手當り次第召捕つた爲めに私どもまで御相伴を喰つた事がわかつて判明放免に爲りました が御白洲法廷に呼び出されてだしぬけに其方どもを引取るものは無いかと申しますから大童は『公儀使』外務長官をして顔も賣れてましたから、江戸中で二十人ばかり私良介も十人ばかり、これ〳〵を知つてると申立てたらそんなに澤山いらないと云はれたりして翌日またく〳〵呼び出されましたところが其の數へた人間がぞつくら簇々並んで居ましたつケ……そこでやつと虎口を逃れました。

渡されたら首が無かつた

あとでなにしに何故あんなに澤山來たのだと申しましたら仙臺藩へ連れて行かれると殺されるから假し藩へ連れて行つた事ならなんだかんだ議論する中に私良介と大童を連れて行つて奪還しまうといふ仕組で有つたそうです此時江戸の藩廳では『御使者長屋』應待所をしつらひて整備牢にしてぶちこむ氣で牢屋から引取れと云つて來るだろうと長屋を牢になほし改修て待つてゐたそうですが幸にも私共は虎口を逃れました藩廳へ渡されましたらそれこそ首が無かつたのさネス。

『七日で濟むのか』

此時は政府の方がもうゆるく爲つて仕舞ましたし、福澤諭吉などが周旋してくれましたから藩廳ではたゞ無罪放免では濟まないから廉を立てるといふ事で一週間だけ先きのしつらいた『御使者長屋』へ大童とはいる入牢事に爲りました『御白洲』法庭へ呼ばれますと境野衛門七などです其他みんな私どもの手下位のものですから笑て濟んだ位その時私が『七日で濟むのだべ』と云つたら『こゝはそんな事を謂ふとこでない』などゝ『御役柄』に云ひましたつケ。

福澤諭吉の周旋で

牢屋に居た間は境野始めしつかり馳走してくれました、毎日々々御馳走でよかつたネスそこで大童に向つて『こんな事なら七日は七年でもいゝなア』と大笑ひしましたつケ。

福澤は其時大そうな勢力でいろ〳〵周旋してくれましたかまわない無頓着人でバツチ絹脚絆はいて尻などひつたくつてから德利へ酒を入れて持つて來たりいろ〳〵御馳走こしらひて來てたべ飲食さして笑つたり語つたり愉快でした。

忘れてた

然るに七日過ぎても何とも有りませんから福澤に話すと、ソリヤ不都合だと謂つて政府へ話すとそうだつ

け忘れてたといふので九日目に牢を出されました。

森有禮から世話しに來て呉れ

すると薩摩の森有禮などが『なアに過ぎたんだから構はないサなんならおれが學校を拵しらへたから世話しに來てくれろ』などゝ云ふので私と大童とそりや難有いがどうも目下のところ藩へも濟まんからと斷りましたが此時は早や政府の方はゆるくなりましたつケ。

いよ〳〵青天白日

福澤が大童と私の事を中にはいつていろ〳〵政府へとりなしてくれましたからいよ〳〵青天白日の身と爲りました。

先きの七日の入牢の過ぎた時にこれは内々だが御前方あと半ケ年ばかり國元に歸つて來てくれるナと遠藤文七郎さんなどの御言葉でした大童は歸りませんでしたが私は少したつと妻子も有り歸りました。

三十人ばかりヤラレました

岡田に潜んで居つた時には氣持惡るかつたネス江戸から仙臺藩の『事情探索』といふものが藩廳へ來ましたがそれに私共の反對の者どもが書附けを出したそうで其の書附けに三十人ばかりの名を書ひて……これはあと々々邪魔に爲るやつこれはそんなんでもないやつ、これは首を切つて仕舞へなど謂つて敎えてとう〳〵ボク々々やられた事が聞えましたが其時は實に知つた者の殺されるのですから氣持が惡るかつたネス

自分の名が見えないから不思議

すると其の三十人の名前の書附けを私に持つて來て見せてくれたものが有りましたが私の名が見えないから不思議だと思つたら私のも點が掛つて有つたので見せるに氣の毒だといふので切り取つて見せたんなそうでした政府の役人よりひどかつた酷ネス政府の人などが知らないのをこつちから敎えるのですからなア。

なんともかとも仕樣が無かつた

大童と佐和と私と保養しようといふので草津から伊香保へ湯治に出掛けて半年ばかりで歸つて來ましたが還つて來た翌日但木と坂が殺されると謂ふのですなア……なんともかともしようが無かつたネス『刎首申附く其藩で沙汰すべし』と謂ふやうな文句でした……刎首しましたと云つて國へ返へせばいゝ可のですが正直に殺して仕舞ひました其前にいろ〳〵みんな皆して政府へ話し込んで貰はうと思ひましたが明日といふ明日には工夫にはゞけました。

すると其日は何んとかいふ日で五月の十六日の刑が十九日に爲りました……十五日の晩から十六日の日は氣持が惡るいから私共は酒などを飲んで紛らかしてゐますと……十九日に延びましたから何とかしようと思つて見ましたがとう〳〵周旋もならず……致方が有りませんでした……

但木と坂の死際

但木と坂の死際は誠に落着たもので二人寄つてゐてそんならといふので起ち上る……其時坂が『世の中の人が死ぬと白張提灯がつくがおらん我等なは付かんのだなア』……今から考へると……わたし私んなは一生失敗ばかりです。

芝多派と但木坂派

芝多對馬と但木、坂とが揃つてゐて戊辰の前に藩を整理してたらあんな事はなかつたのだネス

芝多の派が進めば但本、坂の黨が退く但木、坂の黨が要路に當れば芝多の派が罷めるといふやうに揉めましたからしも〳〵下僚のものまで其度ごとに動搖して何も出來なかつたやうなものでした。

芝多の時の『御奉行』大臣格はなか〳〵古流の人が殘つて居たのです今の大條孫三郎さんの御祖父さんなど私良介が官て世の中が忙しく爲つて來たもんですから、或時同役申合せて『かぶりもの』は「陣笠」のやうなもの羽織は「セザキバリ」背割羽織袴は「義經袴」『と『御奉行』列座の方々へ伺ひましたら『またソンナ事を……今までソンナ事は無かつたのに……罷り成りませぬ……』とあとは二の句もつけず泣寢入りどころか恐れ入つて引下がりましたが芝多が江戸から『早飛脚』で歸つた時私共の上申した服裝の通りにてすぐ登城しましたが時勢は妙なもので誰れ一人異議を言ふものなく、それから〳〵いふものは『陣笠』のやうなかぶりもの『せざき羽織』『義經袴』が仙臺藩に流行り始めたのです……萬事、といふ鹽梅しきでした。

但木坂の時は先輩は居なくなつてましたから餘程自由に爲つたのです。

芝多と但木と坂

人物ですか……サア芝多は但木、坂の上です……マア『エウエウ』英雄とでも云ふのですかなア……坂は『いくさの人』さネス……眞面目な生命を愛しまない人……但木は何んでも御座れ人を容れて說を聞ひたから開けた居つた人でした……二人の比較ですか……丸で違ふさネス……然し藩の事は二人が責任を負つて遣つて

居たのです……芝多は磊落でした、ずばぬけ拔群て居つたネス。

若生と玉蟲

若生ですか……若生は膽の强い人さネス玉蟲は稍沈着でした筆まめな男で御存知のやうに『航米日錄』なんて洋行中によくもあんなに見たり書いたりしたもんさネス。

盤溪

戊辰史に文彥大槻が但木、坂の論はみんな一切盤溪大槻の意見だと書いてあるそうだネス成程そう書て有りましようが、アハ……盤溪なんかは文章がうまいからといふので筆を執らせられただけのことで……まさか仙臺藩の大立物とも謂はるゝものにそんな筈が無いネス、イギリスがどうだとかロシヤがどうだとか位の事は聞いたかも知れませんが……昔しは格が違ふとネス……然し上方では仙臺藩にもこんな文章をかくやつが有るかつてひどく驚いたそうでがす文章では盤溪が骨を折つたのさネス。

細谷

細谷ですかバクチ打ちを集めて戰さしてよく遣つたもんさネス。

×××××××××××××

戊辰の事はまるで夢のやうだネス。

沈着

瑞鳳殿の『御靈屋』を修繕せられし時職工人足あたりを汚せしとて藩士の志有るものゐらだちて家令の松倉氏に談判と決す、細谷氏委員と爲りて談じ込みけるに松倉氏落着いたもの……『人間だから小便もしゝた

べ屁もたれしたべ然し監督のものも有り苟くも御霊屋を汚すやうな事は無い筈ですが假し有つたら皺腹かき切つて御詫でもすゝべ』……細谷うろたへて歸る。

機轉

矢部長利氏或る事件の相談に松倉氏を尋ぬ、矢野氏例の氣焔當るべからず……『某はヤネフキ某の親はカネフキ』……或る時『此のヤネフキ野郎』……と罵りたるに『なに貴樣はカネフキだべ』と云つた話しを聞きましたと言ひも畢らぬに松倉氏すかさず『ヤネフキ』『カネフキ』『ホラフキ』『三フキ』だネス……流石の長利氏も熱湯に水を差されて呆然たり。

大とぼけ

松倉翁の實歷譚を今度こそ吐き出さして呉れんと犇々詰めかく、翁の口より何事か迸り出るならんとみな〳〵片唾呑んで待ちけるに翁は例の女のやうな『もみ手』しながら

『戊辰の御話しろとの仰せでしたが歳を取つて忘れて仕舞つてネス書附が有つた筈だと思つて探して見してすが見附からないでネス……それで天保飢饉凶歳の御話しでも致しすべ……』

と一座呆然、此れ史談會員某の談なり

肝要の點に爲ると

松倉翁晩年耳が聞えぬ々々々々で訪問客困りぬく、然るに此處肝要の點に爲ると、目を見ひらき顔をびよいと突如前の方へ突き出して何事も聞えざるなく恐ろしかりしほどなり。

大膽

保護建造物に爲つた瑞巌寺修繕の落成式に伊達家を代表して松倉翁之に臨む瑞巌寺の屋根はなか〳〵高きに足代を七十餘歳の老齢でゆつたり〳〵上がり下りして平然たるには參列者一同舌を捲て驚きたり。

無心

松倉翁嘗ていはく『工夫には、、、、けた時は酒など飲んでみましたが……近頃七十餘歳は草取りとしました、草取りは一番だネスどうもこうもしようがなくなつたら草取りが一番いゝネス無心に爲るからネス』

歳の効

又曰く『大事にせかないといふ事は歳なやうだネスあなたなどは屹度ゆきますとも……なに私が手本に爲りますと……私など……ひとんでゆきますとも……』

一輪咲きの朝顔に對して

翁勝海舟の『晩香園』てふ大額の下に戊辰を談じ修養を談じ畢りて煙草を吹きつゝ一輪咲きの朝顔の目の覺むばかりのものに對して無心に詠め入りつゝ大事到來の時の心得とも爲るべき作詩でも書て置きましようと云つて別る。

天晴れ大黒柱

松倉翁の伊達家家令たるや黒縮緬の羽織に仙臺平を穿きいとも沈着せる態度にて應接せる狀は横から視ても縱から視ても天晴れ六十二萬石の大黒柱で有つた。

仙臺の小岩倉

松倉は大膽で横着で機才もあり智慧が有つたことは大小はイザ知らず岩倉公を想はせる『仙臺の小岩倉』で有つた。

松倉の膽はふうわりした大膽だ、ふうわりした大膽は稀れだ謂ゆる岩倉式だ、松倉は勝海舟の膽と誠とを慕つて居たやうに思はれる。

半面は趣味の人

松倉翁の左右には誰も知る貼り雜ぜた屏風が有つた、仙臺開藩以來文武の名臣名士の書畫で有ゆる網羅して有つた武將儒者高僧文人墨客なか〳〵佳なものが有つた、翁は朝夕翫賞して居つたらしい。

翁の最も愛して居つたのは何んと云つても清人の描いた小屏風で有つた凡そ十數枚だがふうわりした畫で柳の下を驢馬に騎つて行く圖などとても〳〵逸品で有つた小詩が題して有つたと記憶するあんな畫はとても今の世に見られない。

翁はたしかに書畫に高き趣味をもたれてゐた、翁は杉浦梅潭に學んで詩作された書もかゝれた。

參考　松倉氏の談に往々反對派の惡評手段を訴へらるゝが冷靜に第三者の地位に立ちて之を視るに勿論松倉氏の苦境に同情するも飜て反對黨の談を聽くに佐幕派の壓迫も亦た著しかりしものゝ如し故に此は彼此の事情を克明にして公平嚴正の批判を下すを至當且つ世の義務と信ずるも茲には單に實歷談を筆錄せしゆへ批判は之を他日に俟多に謂るものとす。

以上　明治三十六年三月二十五日午前七時より同十一時まで四時間仙臺市姉橋横丁西側自邸に於て松倉良介改名恂號文潭口演
右著者の修養談を請ひし際興に乘じて談ぜられしものとす明治三十七年五月　日松倉翁歿す。

白河口の「烏組隊長」

細谷十太夫

山雨欲來風滿樓

慶應四年の四月藩(仙臺)から『軍事探偵周旋方』といふ役目を仰せ附けられ白河の『脇本陣』大谷屋源吾方に泊つてゐた。

此時の風で羽振りのよいものは大概女を臨時に抱えたもんだが我輩も白河本町の吾妻樓の妻吉といふのを馴染にしてゐた藝娼妓の今でいふ二枚鑑札ヲ

一日秘密相談の爲め佐藤百介と二人で白河の東の方の『大沼』へ蓴菜取りに行つた舟に棹して水上で相談したもんサところが佐藤の馴染の若松屋のお濱が大谷屋の女房と仙臺屋のお花を連れ酒辨當携えて追掛けて來て『遊びに來ました舟に乘せて下さい』と云ふから五人で蓴菜とりを始め酒盛宴となつた一盃又一盃なにせ二十九歳といふ血氣盛りだから醉つ拂つて麝金の胴卷も肌の帶も取らずにざんぶり沼へ飛び込んで水を泳いだもんサハ……

歸つてから間もなく棚倉藩の『周施方』の何とかいふものが來た此の時の風で酒出した妻吉が來て酌した。

『周施方』が歸つたから濡れた胴卷と肌帶を干してゐた。

ところが我輩の馴染の妻吉がお花に燒き出した胴卷見るとすゞザリ〳〵と滅茶苦茶に裂き殘酒をガブリ〳〵一升以上もグイ飲みしたが何せ三升も飲むといふ評判の女だからネ鉢、皿、德利、座に在るものを手當り次

第微塵に毀はしてとう〳〵短刀引拔いて自害しやうとした……一體お花は偶然葷菜取りに來たんだいよ〳〵やりそうだから短刀を取つ返ひしたら口惜しがることひどいそこでしかたないから藏座敷にぶち込み布團にくるみ寢せたが非常に暴れた然かしとう〳〵泣寢入りサ

妻吉との緣かハ……讓堂樣宇和島より御養嗣『御入部』公式入國で『令幣使街道』野州 御通りといふことで有つたが通行叶はないので道を明ける爲め我輩は佐藤秀六田中伊平兩人と御迎ひとして『御早』駕籠で行つた時白河の大谷屋に休んだが其時晝夜のお酌に出たのが妻吉さハ……

献　策

四月十五日××から仙臺藩は城内(白河)に屯すべからずとの達しが有つた此時仙臺兵は二中隊三百人ばかり居た此れは二本松藩日野源太左衛門といふ大隊長參謀の献策と知れた同じ二本松の浦江瀧之允から聞ひたのだ二本松は××結托して白河を自由にせんとしたのだそこで我輩は浦江の取次ぎで『如何なる譯で仙臺藩を城内に置くことが出來ないか參謀に面會を請ふ』と切りん込だら××××が出て應接したか語塞がるの體サ然かし『御大藩は多人數ゆへ先手先鋒の爲め白河町の南方に宿陣を命ず』と來た『他に事情は無いか』『無い』で歸つた。

そこで我輩は『大番頭』大隊長高城備後に申し出た『會津より襲つて來る會津と戰へば同盟が破れる白河の本町の角より二本松を先鋒として右向き廻れで後へ戻背進して然るべし』と高城策を用ひて隊を矢吹まで戻す矢吹に白河七郎あり そこで『人拂ひ』で『探偵の結果此れより進めば不利益なり』との旨を述べ献策の通りに爲る。

我輩は白河へ還り大谷屋に居つた白河はまるで家内も同然だつたからネ

白坂の『關の明神』の茶屋に南部七平といふ若い者があつたそれをかねて探偵として會津へ入れて置いたが十六日の晩に還り來り略ほ狀況がわかつた十九日晩白河附近を偵察した二十日未明白河の古天神より城を襲ひ一擧で陷れるといふ策だつた城中には××參謀の××××が居た仙臺藩の官軍附周旋方は栗村五郎七郎始め三人だつた。

妻吉時に年十六

××の副官ともいふべき××××が白河の三谷屋に遊びに來て居た表二階で××が『矢吹退却は細谷の策だが不都合千萬だ天誅を加へよ』と言つた。

三谷屋の**お鐵**といふ藝妓は我輩の馴染妻吉と睦ましかつたから『御前の旦那樣が妾の内へ御出でになれば大變だよ妾の内の旦那方は天誅といふ事をするとて威張つてゐなさる』と聞かせた彼等は天誅といふ意味を知らない。

そこで妻吉我輩に向つて『旦那三谷屋に行きなはんな三谷屋の旦那はん方は殺すと言つてゐなはる』『どうして殺す』『天誅といふ事をして殺す』そこで我輩『そりや面白い』と笑つた。

十七日四月朝我輩三谷屋へ行く妻吉いふ『そりやあぶない』『なに見てろ』……刀も差さず唯だ『三尺』兵帶ばかりで行つたそ！て妻吉に申附けて『後から袴、刀、短刀、陣笠、白の毛布を持つて來い早駕籠言附けて來い』

……三谷屋へ行つた。

三谷屋へ行つたら××××外都合三人酒飲んで居た。

我輩はだしぬけに『やァどうした』といつたら『やァよく來た一つ飲め』……三十分ばかり立つと妻吉がやつて來た我輩の白地の袴に刀を落し差し陣笠かぶり白毛布着てヅカ〳〵酒席に入つて來た妻吉いきなり突如『諸君議論はどうだ』と皆んな『愉快だ』『大に飲むべし』とて更に酒出す飯茶碗に注ぐ妻吉は飲むのだから大茶碗でグット一飲みに飲み×××へ差す××呆氣にとらる。

すると三人居た中の一人が我輩に向つて『此頃の評判てば細谷君は「早」駕籠であるきながら御するといふことだがどうだ細谷君なんぼ細谷君でも人の前では出來まいナ然し剛情たから……我輩『そりやなんでもないことだとうだ妻吉御目に掛けるか』妻吉『なあに妾のものを妾が自由にするんですものやりましよう』と早くもメクレて袴ぬぎ白い毛布をさつと布き雪のやうな肌を露はす我輩『さァやろうぢやないか』……すると『こりやひどいことする』とて三人みな呆れて自分の座敷へ逃げて行く。

そこで我輩すぐ袴はいて刀おつ取り毛布着て待たした早駕籠へ乘る……默つて白石の御本陣へ急ぐ。

妻吉時に年十六今ま明治四十一年平潟茨城近く博勞の女房〻爲つてるがたしか四十八な筈だ。

『細谷烏』と十六ささげ

『烏組』の『烏』とつけた譯を話せつて……そりや面白い話そう。

『五月以來『白河口』の戰爭に西軍は屢々本街道より進まんとして奥羽列藩の兵に擊退せられ又た列藩兵は白河を取り返そうとして擊退せられた。

其時我輩は懸命に爲つて戰つたが部下の人達も生命を捨てゝ能くも火水と働ひてくれたもんだが我輩の隊は白河の山を死守して屢々官軍を擊退したので聊か敵味方の間に有名に爲つたもんサ其の時のこつた官軍の方で

なんだあの山に何時も烏のやうに止つちよるのは……どこの兵ぢや……なか〳〵强いやつぢやのう

と囃されたもんだ

そこで敵も味方も『烏』『烏』といつたからそれが通り言葉と爲つてしまいには官軍が

細谷烏と十六ささげなけりや官軍たか枕

とか『寢て暮らす』とか囃し立てそれがとう〳〵敵味方の間に流行るやうに爲つたのだが本は『あの烏』のやうに山の上に止まつてる』といつたのだ

それから『黑裝束』も源因だ『烏』のやうだからネ面白いだろう『黑裝束』だから烏渡わからんサ戰さなんてものは一たび勝つと敵味方の評判と爲つて人氣を引つ立てるもんだからネ烏渡した事で『烏』……『細谷烏』が有名に爲つたのだ。

我輩の隊は『衝擊隊』といつたのだ

我輩が星恂太郎を村田柴田郡に迎ひに行く途中菅生名取郡で晝飯の時『烏』が一疋さつさと座敷へ這入つて來て我輩の皿の肴を喰つた面白いだらう飼つてた『烏』とは知らず給仕のものに聞いたら此邊の男わらしのものだといふから錢遣つて其の『烏』もろうたネそして『烏』へ糸をつけて早駕籠へ附けて行つたが此れからと

いふものは此の『鳥』を連れて廻つて行つたが大の人氣ものに爲つた

そこで白河の『山の上の『鳥』のやうな隊が『黒装束の鳥』で廣ろまりしまいには此の『生きた鳥』でいよ〳〵本物に爲りそこで『鳥』だの『鳥組』だのやれ『細谷鳥』だのと囃さるゝやうに爲つたんだ自分一人ばかりの戰さぢやないのだからネみんなが火水と働ひてくれたんだからなァ……

× × × × × × × × ×

『十六ささげ』か十六人の侍だ十六士は棚倉城主阿部美濃守の家來で藩と議論が合はない爲め脱藩して『精神隊』なるものを組織し大内友五郎を隊長として同じく白河口に奮戰したのだ。

× × × × × × × × ×

白河口の戰は痛快だつた。

一 網打盡

二關源二が脱走騒ぎの節奥羽鎮撫使の久我殿が仙臺城に入られた。

明治二年の忘れもせぬ四月七日我輩は 讓堂様へ御用伺ひに出た。

すると『大目附』の星列之助、東儀平、大島三郎右衛門に逢つた我輩に向つて『まご〳〵してゝはいかぬ官軍から名指して來た今つかまるこつち方でないから待てひけ無い』といふのだ。

此時官軍から名差されたものは左の人名で有つた。

和田織部　若生文十郎　玉蟲左太夫　松倉良介　大童信太夫　齋藤安右衛門

遠藤吉郎衛門　安田武之助　栗村五郎七郎

後藤正右衛門　黒澤龜之進　朽木五左衛門

江馬龜之進　沼邊愛之助　福江源助

横田官平　竹内

それに我輩此外にも有つた此中和田、若生、玉蟲、齋藤、遠藤、安田、栗村の七人は『思召有之牢前申附ける』で殺され松倉、大童、後藤、黒澤、朽木、江馬、沼邊は逃げ横田、竹内等は『入牢』仰付けられたが後で無事揚がつた放免

尺八ささない白井權八

凄じかつたもんだ官軍から名指されるなんてなァ此時我輩は『鳥組』七十餘人と仙臺は片平丁の鮎貝屋敷に屯(たむろ)してた今の監獄のとこだつた七十餘人の『役附』や『添附』は

矢野長之進(長利)　安藤忠吉(後藏)　柴田文吾

横山雍三郎

で小隊長は

武藤鬼一　渡邊武平　鈴木新一郎

蓬田選三　笠原多十郎　半澤丹三

で有つたがすぐ『立退け』そしてめい〳〵覺悟せよと命じた。

× × × × × × × × ×

此頃で有つた鮎貝片平丁の勝手臺所に遊びに行つた時も『烏』を連れて行つたがサッサと歸つて來てガア〳〵と三聲啼ひて死んだ安藤だの弓田だの不思議だ〳〵〳〵と云つた。

× × × × × × × ×

我輩は笠原より貰つた赤糸入り堅縞の紬の袷着てそつと片平丁鮎貝屋敷の門から出んしとたところが此時遲く彼時早くパッタリ捕手に逢つた六七人サ

捕手『細谷の屯所は何處だ』

細谷『角を廻わし始まりの大門より入ればそうです』

危機一髪すたこら其足で逃げ出して元荒町を通り三丁目大町横丁即ち『下八軒』から『肴町の源吉』とこへ駈け込んだ『源吉』の娘で有名な男衆『今助』の女房にお竹といふ二十三四の男まさりの女が有つた。

お竹『隊長さん何んですおらとこへ御出でになつてサ皆んなでたつた今ま召捕りに行くとて出て行つたとこなのにネ

細谷『ハ……そうか』

源吉は『目明』で名題の親分なり密會の座敷が有る東と西と兩方に入口有りて中に隔ての有る座敷だ其の東へ入れられ火鉢とお茶持つて來たきり一切人を入れず夜の四つまで置かれた男衆などいふものは感ずべきものだヨ。

夜の四つ頃に爲つてから源吉の裏の『中正』の立町の饂飩屋の板屏の板一枚離して逃がされたから其の夜の中に南木町に有名な『鍋嘉吉』といふのが有つたがネそこへ潜んだ連坊に『忍笠』を賣つてたが之を蒙つて仙臺中をうろついた羽織も何も着ずたゞ刀一本落し差し帶は『結び帶』何の事は無い尺八差さぬばかりの白井權八サ

『烏組』の解散に千兩

漸く仙臺を逃げ廻つてゐ中に八幡町の齋藤屋久吉といふ鍛冶屋へ行つた『目明』の手先きだ窮鳥懷に入るの格ナ事情を話したら『よしッ』とばかりに男氣の久吉一言の下にかくまつてくれた齋藤屋かネ八幡で有名な樋口屋の隣り即ち今の學校の西隣りで裏の『離れ』へかくまれた久吉方に預かられた女が居たお仙といつてネ大町四丁目『松茂』といふ小間物屋の娘であつたお仙か久吉の吩咐で御飯も夜の酒も萬端世話してくれたネ

藩の『御藏元手代』に炭屋彦五郎『炭彦』の手代に安住清太郎といふのが有つて元の鹽藏丁今の東一番丁村松君のとこに居た此れから『烏組』を解く爲めに千兩借りたそして八幡町から肴町の割烹店三木屋へ部下の安藤忠吉俊藏を筆頭に弓田、柴田、武藤、渡邊、蓬田等を呼んで千兩を渡したそして『居るにいゝもの仙臺に居れ居られぬものは立ち退け』と申渡した我輩が白河から生き死にを俱にしたんだもの腹の中では血の涙だつたヨ千兩は安藤忠吉に渡した經濟が上手だつたからネすると安藤が『隊長百兩上げます』といふから我輩は『どうにもなるから』つて二十五兩貰つた九百七十五兩が白河以來『烏組』の解散の涙金だつたヨ

× × × × × ×

肴町の三木屋は『烏組』の集會所で『太政官』と謂つたもんだが老女將のお傳といふ女は傑物で世に響ひたもんだ。

島田娘になつて定義へ

八幡町て怪しく爲つて來たから氣を拔かんと定義宮城へ入湯と出掛けた安藤忠吉の姉と女中とお仙と大黑屋の娘と齋藤久吉の甥の清之丞を連れて『御膳籠』で湯治サネ清之丞といふのは茶屋町の饅頭屋で有つた。

我輩は島田娘のカツラこさいさして赤い腰卷しめたネ女と化けたもんサ。

定義でお仙の三味線で大黑屋の娘か躍る晝夜大騷ぎした騎虎の勢でネところが細谷は定義に潛んでるといふ事か仙臺へ知れてネアハ……

ところが米澤のもので官軍の探偵してるものが有つたが此れが國分町の田中屋の女郎二人にお傳連れて同じく定義へやつて來た此の探偵が來たか我輩花形を引いたもんサするとお傳かそつと我輩に向つて『あの旦那は探偵ですしきりにあなたの事聞てます御用心……』といふのだ……構うか……我輩は『花』で勝つた。

すると仙臺から容易ならぬ急報が來た細谷は一人では捕られまいといふので『御小人』巡査が面かも十六人も捕りに來るといふのだ『八幡堂』町の久吉に寄つてネそれか來る前日に知つたもんサ。

さア來た我輩が湯へは入つて上がつたら來た十六人か遣つて來た。

召捕られるものか。

三味線彈くやら躍るやら我輩の一座は大騷ぎだ安藤の姉か居らなかつたが皆大はしやぎにはしやいでゐた。

捕手は來たに來たが呑まれて仕舞つた。

そこで捕手へ酒飲ます。

女の仕度裝束で跳ねるやら男の裸躍りやら皆な夢中のていたらくだ。

此の騷ぎの透きにチョット見たら湯守の二階から裏山へ跳ねるによい……飛んで跳た……その足で眞裸でネ一目算に名高い天狗橋の前の炭小屋の中に潛んだ暮方だつた。

捕手の若者か皆な定義へ泊まる。

お仙と大黑屋の娘と長之丞と三人へ『犬』密偵に附いて來たものがあつた米澤の探偵から仙臺へ密使に遣つたものだ三人とは前々から申合せが有つた天狗橋とこの茶屋へ泊るといふ約束サところが橋の北側で久吉のとこへ出入りの炭屋へ行つて三人とそこへ泊つた。

翌朝四人で大倉から山越して根の白石宮城郡へ出でそんから中山から國見へ拔けてまた八幡堂茶屋町へ戻つた

番頭さんの丑松仙臺へ

茶屋町の町はづれに丸屋の抱地が有つた主人は天江勘兵衛翁とて六十餘歳その妾が居つたが名はおけさとて十八九で有つた。

夜暮れてから茶屋町の鰻坂から下りて下り口の長之允宅へ潛んだお仙と大黑屋の娘は久吉方へ歸つた。

五ツ頃おけさのとこへ行くすると

おけさ『まアなにしに來たあんだ定義……今あすく彼方で騒いでるのはあんだ待つてる今ま抑さい召捕られて來るさて大變……〳〵』

細　谷『そうかァ……』

おけさ『召捕か定義へ行つた事を聞ひておやち丸屋主人が心配して、八幡堂の人達有志と八幡樣へ寄つてあんだの危難除けの夜籠してるのですが今夜も遣つてます』。

細　谷『かたじけねい』

話しの最中に『表』が明く

來たナ　電光石火

座敷へ駈け入る間がない。

臺所の膳椀の戸棚の中に……一時間ばかり。

捕手探がす見えない歸る。

ちいさま丸屋主人『夜籠』から還る戸棚から出される馳走され夜中まで飲む。

齋藤屋久吉へ人を遣つて『行つてもいゝか』『いゝ』裏から行く。

あぶない兎に角居られない。

久吉のとこへも遣つて來た此時は島渡だつたが一番劍呑だつた餘り急だつたから裏叔へ揚がつた、そして隅の方に仁王立ちに立つた、すると下から鎗でズブリ々々々やつて見られたがもとより隅の方だからネ……さう〳〵虎口をのがれたよハツハ……

明くる朝長之允とこへ行つたがぶつこれうち破れ家でネ寢てゝ月見るあばらや菰吊るしてる。

何せザンギリ頭髪では困るといふのでお仙か機を利かして大日樣の髪の毛でカモジこしらいて髪ゆうて『番頭

さん』にしてくれた丑松とつけ命名て番頭さんに爲つたワケさ。

そうサ紺の腹掛け淺黄の股引紺の前垂れかけて上は堅縞木綿の袷に白足袋白鼻緒の草履でネ。

御誂ひ向きの『番頭さん』名も丑松

其の姿で肴町の三木屋へ行つたもんサ内の者は兎も角外の者は一切わからず探偵などにわからう筈はない。

◇　◇　◇　◇　◇

我輩の内では抑さへ捕召らるれば殺れるにきまつるから大心配だつたそうだ。

探偵の前で躍る

細谷は肴町の三木屋へ出入りするといつて探偵が嗅き附けて遣つて來た。

三木屋のお酌におるつといふかしこい小女が居つた。

探　偵『細谷は居ないか』

おるつ『細谷さんですて存じません』

探　偵『知らぬ筈はない』

おるつ『それぢや太政官といふ方でしようせい身長六尺ばかり頭大きく眼は此位で兩指口か耳まで割れたかと思ふほどで髪は切らないで肩まで下がり鬼のやうな人です』

そこで探偵は剛惡の人と見た。

探　偵『酒はどの位飲む』

おるつ『一度に三升位飲みます』

探　偵『そうか……』

此時の流行歌に

雨はションボ〳〵降りしきる、夜はしん〳〵と

今鳴る鐘は何時ちや、そうサ八ッでも有るべい

アヽ腹いてい病な、そんなら此の瀬原の虫藥

アヽにげい苦した

去國恰度三歳春　爲御醫者樣之姿

御國の病がなほしたい

といつて瀬原の虫藥の歌が流行つたもんサ。

お傳と三木屋の女と此の歌の躍りをこしらへて稽古中へ探偵が乘り込んで來たのサ。

探偵は細川の家中。

てれてしまつた酒出せサ。

酌婦ども『番頭さん』にもやつて下さい』『よか呼べ』

お傳の三味で『番頭さん』此の歌を躍る。

餘程氣に入つたと見えて『はな』頭經に『改正手形』五百文ばかり貰ふ。

一座どつと笑ふ。

探偵げげんな顔して何だ〳〵。

言はぬ。

お客の探偵『料理まづい何かないか』

『番頭さん』早速の機轉、芋すつて卵のしろみ入れて『泡雪』こさいてツュにして出した。

非常に御褒めに與かる。

探偵上機嫌で歸る。

探偵が歸つてからお傳の部屋三木屋で酒飲んで居たらそれこそ木萱も眠る丑滿頃に召捕り捕吏が蹈んごんで來た。

× × × × ×

三木屋の妹にお安といふのが有つたが此時てふど婿取るとこだつた明日か明後日さ。

女はしぶとい横着もの。

召捕り捕吏を騷がしてどさくさしてる中に

お傳の機轉、自分の部屋の酒道具を手早く片附けて床とる。

婿を追つ立てる。

花嫁お安の床の中へおれ細谷を入れる。

それは々々早いそしてお傳はお傳で寢たふり。

大膽不敵花嫁の枕元の行燈を消せばいゝのに消さない。

間髪を容れず。

ドヤ々々土足で六七人蹈ん込む。

最先きにお傳の部屋に蹈ん込む、寝て居る。

捕　吏『細谷來てるだらう』

お　傳『御出でになりません』

お傳先さに立つて手燭つけて二階見たけれど居ない。

次に奥座敷夫婦と小供が寝てるこつちの部屋には女中と番頭ばかり。

お傳の部屋に行く途中の部屋の前に立つて

捕　吏『此れは何んだ』

お　傳『こればかりは……どうぞ御免を……』

見れば水引かけた頭で御嫁さま……が寝てゐた。

添寝は友白髪の婿どのハッ……。

× × × × × × × × × × × × × × × × × ×

賓の山に入りながら手を空ふして歸る。

また酒肴で飲む。

『小梅林』ことへも捕手

夜の明けぬ中に肴町の三木屋を飛び出して明け〳〵に榴岡神明下『小梅林』料亭へ行つた亭主は或る事情で留主だつたがお神はなか〳〵の女で前は戸棚といつて廻り戸棚これを推すと陰座敷そこへ隠さる。

ところが夜いよ〳〵更けて此處にも來た。

六月頃だつたから眞逆かと思つて二階へ上がつて涼みながら酒飲んでゐたそこへ來た。

捕手は宮澤とて有名な熊吉に殺されたもので有つたが女中に氣の利いたものが有つてだまされて歸つて行つた。

小梅林も此通り、感心なことにはお神が『どこへ行くにも金ですから』とて布へ縫附けて二分金で五兩くれた忘れられないサ。

その足で藥師堂小梅林附近別當方丈大如のとこへ三日ばかり潜んだおれ細谷は鹽釜法蓮寺で小僧仲間だつたのだ。

疱瘡娘へ婿になれ

藥師堂にも居られず根の白石宮城郡の實澤の櫻田新治が開墾したばかりのとこへ行つた篠竹の籔が有つたから篠竹で小屋造つて潜んでゐた。

ところが新治の近所に一軒の百姓家が有つて毎日そこのおやぢが遣つて來る。

細　谷『お前どこだ』

おやぢ『相馬だ親か櫻田の旦那に御世話に爲つたから御恩返へしの爲め百姓すけ助手に來たおれは大和巡
うもした』
おやぢ『お前田植すけろ』
細　谷『よし／＼手傳はう』
そこで苗運び苗打ち、ぢいさん大喜び『湯へはいれ』　湯へ入る『泊れ』泊られない小屋へ返へる二日すけたさ
なぶり馳走に爲る
此のぢいさんの惣領娘は此時ほうそう煩つてはれ引かずぶく／＼ふくれて目も見えぬ女だつた。
おやぢ『あんだ此の娘の婿になんなさいおれの財産は山は×××田は×××畠は×××有る』
細　谷『おれのやうなものはダメだよぢいさん青空笠にかぶる方がいゝよ然かしぢいさんとこいゝから
辛棒しますべ』
ぢいさんひどく氣に入つて味噌漬大根など貰つて歸つたが疱瘡娘に婿になれとて毎日口說かれたには弱つ
た。
櫻田から三升よこされたから大に助かつたが間もなく無く爲つた。
七北田へ行く

小便するふりして

七北田の橋の際の茶屋伊藤廣吉方へはいつた此のがゝ女房が大の細谷信仰家で下へも置かず座敷へ通され馳

走された。
時に宮床黒川郡へ捕手が向つたそれはおれ細谷を探偵に行つたのだが今ま歸つて來たといふのだ、出て見たら松
坂外一名だ。こうなりや構ふか、膽不敵サ。
細谷『おれを探偵に行つたそうだが何用有る』
松坂『まあ／＼……』
自分を捕りに行つたものと三人で飲む。
三人で仙臺へ返へる話し／＼北山の光明寺門前まで來た。
眞暗な晩
小便するふりして田町の横丁へはいる。
垣根へ喰つ附ひて透かして視る。
たねて探がも見えず。

× × × ×

九番丁上ぼりて木町通より八番丁へ出で土橋通りより八幡堂の久吉方へ着いた。
此處でもあぶない
長之丞連れて夜道かけて芋澤宮城郡へ行つた斗塋明神の前で新しい刷毛を拾つたものが有る『緣喜がいゝ』
『片倉小十郎は『刷毛印』おれも天下に出でゝ『刷毛印』だ『おれに呉れ』今に保存して有るサ。

芋澤は奥山太藏方へ潜んだ仙臺へ炭賣りに來た縁故だそこにも居られず大倉宮城郡の葦沼で林といふ母と娘と後家さんの三人暮しのとこへ行つた若い者使つて百姓だ。

此年は明治二年で作が惡くつて米一粒取れず困つてた時だが快くかくまつてくれたのみかばアさんおれの爲めに毎朝水垢離取つて難除けを祈つて呉れた或る日ばあさん八卦置て非常に好い卦だといはれた時には嬉しかつた。

此處で毎日山芋掘つたり蕨とつたり重もに蕨粉で飢を凌ひでゐた。

女の子が有つたが飯喰ひたいとて騒ぐ芋澤の山奥まで米貰ひに行つたつけが味噌や大根漬澤庵なんぞ貰つて歸つた忘れられない。

だん〳〵知れる

飛び出してまた々々定義の湯守のとゝへ潜ぐり込んで厄介に爲つた。

× × × × ×

林の小さな娘さんは今ま新坂通に居るが逢ふ毎に感慨無量サ。

風向きが變つて來た

定義の湯守のとこへ潜んでる中に仙臺の涌谷玄恭から長之丞を頼んで迎ひが來た何事かと思つたらこうだ『仙臺領に水戸浪人が潜伏してるが之を捕ひて引渡さなくてはならぬ、然るになか〳〵のものどもだからそれには細谷でなくてはならぬ』といふのだ風向きが變つて來たのサ我輩は『よしつ』引受けたサ。

そこで冬で有つたが鹽釜を振り出しに石巻・古川それから見附からぬふりして大河原へ行つた、それから福嶋へ行つてバクチ打ちの親分のとこへ浪人尋ねに切り込んで大持てに持て一朱金で拾兩を贈られた引返いして鎌先刈田郡の一條から山を越して最上に出で山形の有名な『丸萬』に『角』といふ我輩の部下が居つたから下へも置かず扱はれた此時の風で姉女郎一人あづけられ此處でも一朱銀で拾兩以上贈られた天童へ途中月が澄んでたから寂しくもあるし腰折一首

故郷をいでしこのかたしべるなく
今宵も月に宿をかるらむ

と詠んだ、天童山形は足輕町へ入つたが寒くて〳〵やつと漸く返へつたが泊められず楯岡山形へ行つた。

楯岡でひよつこり大黒屋の女に逢つたぢやないか感慨無量のていたらくさバクチ打ちの親方の圍者かこひもの妾と爲つてるといふので大へんな取扱ひ時の風習で女郎屋へ泊められた二階で酒宴の最中、町の女小供が何氣なしに

細谷鳥と十六さゝげ
なけりゃ官軍高枕

と歌つてるぢやないか感に迫つたネ……

× × × ×

こんな風で忘れもせぬ明治二年の四月七日から十二月七日まで逃げ廻つたヨ。

石巻で白箸燒て辭世を書く

忘れらりようか石巻

明治四年九月の十一日　命に依り石巻への途中松島から引戻された。

松嶋の扇屋の前で藤堂藩の兵に逢つたが小野の官軍の應援に行くのだところが藤堂藩の兵から我輩に向つて本部に用が有るから戻れといふ小野へ戻つた。

本部が小野の福島屋で我輩はそこで詮議されたポケットの中から春日左門への書附けを押收された我輩は、『藩の重役に下知訓令受くべきとこだが時間ないため專斷に出た若しいかぬ不可なら藩の處分受ける切腹も厭はないが此處では出來ない、但し重役へ差出すため押收書類の請取證吳れ』と言つたら『天晴れだ』といふものも有つた然るに我輩の『恐れ入りました』といつた言葉尻りをつかまいて『侍が恐れ入る上は……』といふので手錠や繩掛けられた責めらるゝ時は拔刀二人ピストル二人嚴しいもので有つた。

小野から石巻へ送らる湊の荒町の參河屋といふ餅屋へ『宿預け』に爲つた參河屋の亭主は甚七とて五十女房はお辰四十四五の二人暮しで煮賣茶屋營業だつた官軍十四五人づゝ劍着鐵砲で晝夜となく護衛嚴重だつたが劍着を座敷や隣子に立てゝ一時間交代で有つた、此晩官軍の本部平塚基威方で暮六ッ半今の午後七時頃詮議された我輩の申開きは斯うで有つた。

『主人恭順謹愼中で有るから藩臣は其の實効を奏しなくてはならない萬一官軍に對して發砲する如き事

有りては實効を奏する事は出來ない故に自分は一命を賭して重役の命を待たず處分した殊にも私の兵は烏合の衆だに因つて万一の事有れば主人に不忠と爲るから遣つたのだ……』

と述べたら官軍の醉つたものなど『一方の將たるものは左も有るべし天晴れだ』などいふものも有つたが『下がれ』……で退出したが又呼び出された四ッ過ぎの今の午後八時過ぎたつた『誰にいひつけ命令られた』『身分は何んだ』なんて問ふからそれ々々應ひて休息させられた、此時兵隊が前後左右ぞろ〳〵おつ取り捲いてゐた宿へ歸つた。

翌朝十二日九月『勘解由後』の新田彦八が官車の『御取扱方』で仙臺から出張して來たが新田は我輩の友人上田彌五郎の弟だつた。

ところが新田が宿のお辰に托して私にそつと物に手紙よこした。

番兵が目の前に居るぢやないかお辰はなか〳〵の女機轉を利かして鼻紙持つて來て縛られてる我輩の鼻かむ御茶飲ませる風に見せかけそれを潮に手紙を机の上にひろげて見せてくれた。

ところが新田の手紙の趣きはこうだ。

今夜九つ十二時砂山石巻の『波除不動』の前の松原で首を切るといふ事に評議一決して已に土壇を築きに遣つたとの報に接した……宿元に申置く事あらば……

といふので有つた……。

そこで『書置』だネ晝御飯の白箸を下げずにそつと燒ひて貫つて筆に代え三十枚ばかりの鼻紙へ辭世五つ

六つ書いた。

（辭世）

君のため國のためにて死ぬるなら
いかてはつへき武士の道

（辭世）母へ

國のため死するいのちはをしからめ
たゝ思はるゝ君と母とを

（辭世）兒へ

國のため君の爲めとはいひながら
賊となる身のわれを慕ふな

（絶命辭）

欲攘洋氛多年志。誰誤一朝屬水泡。
二十九年片時夢。爲忠義鬼護皇基。

それから『烏組』の兵へ一枚新田へ一枚……今に三枚ばかり白箸の辭世が殘つてよう。

死を待つてた。

死ぬ時は此儘縛つて殺されては醜いから繩を解かせて立派に割腹の覺悟だ。

其時の覺悟が腸（はらわた）は奇麗さっぱりせい々々して胸中一點の塵もなく内家（庭）も何も考へずただ夜（よる）の殺されるを待つてた。

× × ×

すると四ッ頃（時）十二トット〻と兵を率ひて遣つて來るものが有る。

『官軍の隊長ぢや仙臺藩の細谷の居るとこは何處だ』……番兵『こ、ち、ら、だ……』と言ふかいはぬ中にズカ々々やつて來て

隊長『飲まんか』

細谷『大好物だ』

隊長『御前か』

細谷『そうだ』

隊長『おつか（女房）々々々々肴がないか』

宿の女房『あります』

隊長『早く肴を用意しろ』

『ハ、ア いよ〳〵殺されるナ七北田（なきた）でお仕置（死刑）の時堤（つつみ）で御馳走される分だ』と思つた。

宿の女房お辰大急ぎて肴持つて來た机の上に膳置く

隊長『おつか（女房）布團がないか』

お辰『有ります』
隊長『もつて來い』
隊長みづから布團敷ひてくれる『さア坐るべし〳〵』……
坐つた。
隊長『屏風ないか』
お辰『御座います』
三尺ばかりの六枚屏風持つて來る
自ら屏風立てゝくれる。
隊長『暫時御退屈でしようがゆつくりおあがんな召上さへ』
さつサと兵を率ひへ行つて仕舞つた。
不思議!!!
醉はん

× × × ×

此の出來事の前に石卷の仲町(なかまち)の『阿部半』の主人秀藏といふものと薪屋喜三郎と『鳶』消防組の親方喜助と三人が我輩が晩に殺されると聞て御別れだと言つて馳走持つて見舞に來て呉れたが逢ふことが出來ない。
此時『今かゝゝ』とお辰に夜明かし終夜飲ませられたが飲んでる中に夜が明けた醉はん

來ない
新田を尋ねさして聞かす……
石卷では我輩は此の夜殺されたと云つて居た。
石卷の人は我輩感激に堪えない我輩が殺されたら死骸を貰つて仲の瀬の北に秋葉山といふのが有る其の松の木の下に埋めて供養石立てゝくれるんなそうだつた。
『なぜかつて』
『細谷あれぱこそ石卷が燒かれない』と言つたもんサ
春日左門の策は戰さして退くといふのだつたが我輩は反對で行つたのだ
『石卷とはどうゆふ緣故だつて』
『我輩は慶應元年の春から三年春まで『鑄錢方』で石卷に居たもんサ』

× × × ×

此時毎日石卷の人々からそりや大した同情だ酒は樽肴は鯛御馳走で大賑ひだそれで我輩は縛られて居る縛られてる我輩が讓堂樣から岩沼で拜領のヨヘギ吳呂の洋服着てたなにせ縛られてる人だから大小便には弱らせられたが幸い例の機轉のお辰が扱かつてくれたから助かつたラを抑ひてネまるで小供のやうにしてサ
九月の十一日から十九日まで九日間といふもの縛られてた。

十九日の晝頃仙臺藩の『大目附』溝江一角が『御小人目附』の何んとかいふもの、外に『並御小人』二人連れて我輩を請取りに來た我輩の副に弓田豐治といふのが同じく縛られて居たが詮議も何も無かつたか互に千萬無量の感で無言の中に別れた。

四人は德川の兵で我輩の『烏組』の兵は二十一人居たが『宿領け』で縛られなかつた此時の狀況なんてものは戊辰のどさくさだもの今から想像も附かんサ。

ところが藩の駕籠に乘せられて行くと石卷の仲町の高須賀河岸の登米の藏屋敷で駕籠から出されて縛つたの解かれたネ。

始めて自分で箸執つて飲食したヨ

× × × ×

我輩の恩人石卷の湊の荒町參河屋の亭主甚七の女房お辰が年七十六蕭屋喜三郎が六十に生きてる（明治四十一年）石卷へ行たび大に飲むサ。

『アゝ忘れらりようか石卷だ』

註　漢詩を作るのは此の時代の流行で大抵は作つた、細谷氏も詩作位の學問は若い時したもので現に白箸で書いたのから寫したので有る後世の誤解なきやう記して置く

以上

明治三十三年五月三日午後六時より同九時三十分に至る三時間半仙臺市木町二十番地（北材木丁つき當り湯屋裏）儒屋に於て細谷十太夫改名直英（なほひて）口演――同氏懇請に因り筆記せしものとす

明治四十一年五月六日仙臺市北八番丁林子平菩提所龍雲院住職鴉仙直英（ぎえい）和尚として細谷十太夫遷化

參考　所謂『細谷烏』の戰記は西軍側及び東軍側の戊辰戰史『白河口』の條を照し視ば明かなり恐らく『細谷烏』の戰鬪動作の痛快は思ひ半ばに過ぐるもの有らん此間細谷氏の實歷談は其の裏面史として興味津々後世得難きものたらん也

教訓

國家に貴ぶ所のものは人才に在り社會に貴ぶ所のものは同じく人才に在り。

人才とは才なり膽なり誠なり此の才膽誠三長を貫くに愛を以てするものは人才なり。至誠は愛の極なり。

才膽誠の三長之を兼ぬる有り偏する有り而かも三長なるもの之を千辛萬苦の間に投して始めて燦然として光りを史上に放ち功を萬世に垂る國家に社會に偉業を立つるもの皆な然らざるなし。

近世の日本は關ヶ原の一戰に出發して戊辰に一先づ結局せられたり德川に與するものは戰に勝て絶對的平和に眠り三成派は負けて依然として人類の生存競爭に處する苦戰惡鬪を敢てして戊辰に際會し偉業を成せり一は平和に眠り一は苦戰惡鬪に生きたり。

今や世界は交通機關の非常なる發達に伴て人類の生存競爭は昔日の比に非ず絶對の平和主義の成立する能はざると共に絶對の生存競爭苦戰惡鬪適者生存主義のみも成立する能はず要は愛より流れ出る平和を主義方針として生存競爭苦戰惡鬪適者生存すべきのみ。

斯くして才と謂ひ膽と謂ひ誠と謂ひ愛と謂ひ國家の爲め社會の爲め始めて光彩を放さん也。

如何に多數の人才有りとて相爭はば何か爲ん是に於てか協力合力の必用有り。『物合力則强離則弱』、『戊辰の人物』は何を諸君に教ゆるか。

大正十四年三月十日

著者識

大正十四年四月八日印刷
大正十四年四月廿五日發行　（非賣品）

發行兼編輯人　矢野顯藏　仙臺市教樂院丁六番地
印刷者　山本晃　仙臺市教樂院丁六番地
印刷所　東北印刷株式會社　電話（二八七番）（八六〇番）

524
198

終